

現代思想の冒険者たち Select

# フーコー

Michel Foucault 知と権力

桜井哲夫

講談社

本書はシリーズ「現代思想の冒険者たち」  
26巻「フーコー」の新装版である。

装丁——高麗隆彦

## まえがき

ある日、インターネットのサービスのひとつTeinnetを通じて、カリフォルニア大学の系列すべての大学図書館をカバーしているMELVYLシステムに接続してみた。そして、人文科学関係の書籍目録でミシェル・フーコー関係の書物を検索した。すると、全部で二百八件の著作があることがわかった。そのフーコーに関する各国語の著作の題名を読んでゆきながら、あらためて世界的なフーコーの評価の高さを思い知らされた。

フーコーが亡くなって、十二年の歳月が過ぎた。この間、ベルリンの壁が崩壊し、東西ドイツが統一され、ソ連という国家が消滅し、冷戦が終結した。フーコーの同時代人としてのドゥルーズやガタリが亡くなった。フーコーの師のひとりであったアルチュセールも亡くなった。

思えば、この十年ほどは、時代の波の過ぎ去る早さに驚かされ続けてきたような気がする。思想の世界でも、移り変わりが激しい。かつてもてはやされた寵児も弊履のごとく捨て去られ、人々は、ひたすら新しいものを求めて走り続けてきた。時代に迎合し、変わり身ばかりが目立つ世の中である。だが、新しいとはどういうことなのだろうか。

新しいということは、時代に迎合することではなく、時代に向かって、「否」を突きつける営為であったのではないだろうか。常識を破壊する、人々が寄り掛かっている現実を揺り動かす、そうした知

的努力こそが、世界に新たな可能性を生み出してきたのではないだろうか。このことを思えば、フリーコーの仕事は、つねに新しいといわざるをえないだろう。なぜなら、それはつねに既存の枠組みへの挑戦であり続けたからである。

だからこそ、いま再び、フリーコーの仕事を吟味することは、二十世紀末にいたってさまざまな枠組みが壊れ、大きな空洞＝空白が世界を覆っているなか、新しい知的可能性を生み出すための第一歩でなくてはならないだろう。

フリーコーは、つねに新しい読者を受け入れる。フリーコーは問いかける。「なぜ、私はここにいるのか」、「なぜ、私は苦しいのか」、「私は何者なのか」。フリーコーは、自分の仕事を「自伝（私の物語）」の一部なのだと述べているが、読者はそこに自分の物語を読むことが可能なのである。すなわち、フリーコーの思索は、現代に生きる我々の生存の苦悩と直結しているのだ。

さあ、新たな思索の手がかりを求めて、フリーコーの「道具箱」を開くことにしようではないか。

---

フリーコー

---

目次

---

現代思想の冒険者たち Select

---

まえがき	1
序章	
その死から	9
1 波紋	10
2 アミティエ(朋友愛)	20
第一章	
高等師範学校生・フーコー	31
1 戦争の時代	32
2 受験準備	41
3 エコール・ノルマル	52
第二章	
北の街へ——フーコーの「さすらい」	67
1 科学的認識と障害物	68
2 思想的転換	80
第三章	
『狂気の歴史』——精神医学の考古学	95
1 「狂気と非理性」	96
2 称賛と批判	104
3 まなざしの考古学	126
第四章	
「人間」概念の解体——人間科学の考古学に向けて	135
1 ニーチェとマルクス	136
2 『言葉と物』	148
3 フィクションとしての「人間」	169
第五章	
政治の渦のなかへ——チュニスからヴァンセンヌへ	177
1 構造主義	178
2 チュニジアのフーコー	184
3 ヴァンセンヌの日々	197
第六章	
「管理」のまなざし	
——「監視と処罰——監獄の誕生」とその背景	207
1 真理への意志	208
2 処罰社会の分析に向かって	217
3 『監獄の誕生』	228
4 デイシプリン	238
第七章	
「性」と「権力」の迷路——フーコーの最後の苦闘	253
1 性という現象	254
2 管理社会と闘争	265

3	司牧システム	274
4	朋友愛の探求	279
5	ひとはなぜフリーコーにひかれるのか	288
	フリーコー略年譜	299
	主要著作ダイジェスト	310
	キーワード解説	317
	読書案内	323
	あとがき	326
	索引	342

写真提供  
朝日新聞社

現代思想の冒険者たち Society  
フリーコー——知と権力

序章

その死から

# THE FOUR LAST THINGS Foucault



ミシェル・フーコー

## 五十七歳の死

一九八四年六月二十五日、パリのラ・ピティエ・サルペトリエール病院の一室で、コレージュ・ド・フランス教授の思想家ミシェル・フーコーは、感染したエイズのために死亡した。五十七歳の誕生日を迎えてから八ヶ月が過ぎていた。フーコーは、このとき、世界中の読者から長い間待たれていた『性の歴史』シリーズのうちの二冊『快樂の活用』と『自己への配慮』を、ガリマール社から出版したばかりであった。

それより一ヶ月ほど前になるが、友人のクロード・モーリヤックは、五月十四日、セバスチャン・ボタン街にあるガリマール社の構内から出ようとしたとき、偶然フーコーと出会っている。フーコーは、見本ができたばかりの『快樂の活用』を三冊たずさえていた。そして、そのうちの一冊に「出会いのしるしに、友情の証しとしてクロード・モーリヤックのために」とサインし、モーリヤックに贈呈している。フーコーは、満を持して書きあげた著書の出版を待つばかりだった。

しかし、六月二日、彼は、突然、パリ市十五区のヴォージュラール街の自宅で意識を失って倒れた。ただちに私立病院クリニック・サンリミシエルに運ばれ、九日に、サルペトリエール病院に転院した。そしていったんは、ある程度まで回復して、知人、友人と面会し、手紙を読み、新著への反応を気にし、アンダルシアやエルバ島への旅行計画を練っていた。また、病院で、テニスのパリ・オープンの

テレビ観戦が、治療のために中断されることに不平をもらしていた。彼は、とりわけ、マッケンローとレンドルの試合を見たがっていた。だが、六月二十四日になって、病状が急変し、高熱にうなされ、翌日死亡したのであった。

しかし、そのとき、この世界的に高名な思想家の死が、エイズによるものだと発表されなかった。サルペトリエール病院の神経科部長ポール・カステーニュ教授とブリュノ・ソロン医師は、フーコーの遺族の了解を得て、次のように翌日の『ル・モンド』紙上(二十六日午後に出た二十七日付紙面の二〇ページ下段)に声明を発表した。

ミシェル・フーコー氏は、一九八四年六月九日、サルペトリエール病院の神経系疾患の病棟入院しましたが、これは、敗血症を併発している神経疾患の徴候のために必要となった追加検査をおこなうためでした。この検査によって、脳に化膿かのみした病巣があることがあきらかになりました。抗生物質の投与は、当初、かなり効き目がありました。そのため一時的に症状が和らいだことで、先週、ミシェル・フーコー氏は、氏の最新著作についての最初の反響を知ることができました。しかし、突然の症状の悪化が、あらゆる有効な治療の望みを奪い取り、六月二十五日午後一時十五分、死が訪れました。



フーコーの死を報じる『ル・モンド』紙(1984年6月27日付)

### 時代の病

その後も現在にいたるまで、この公式発表がくつがえされることはない。しかし、死亡した翌日、『リベラシオン』紙のコラム「昨日午後一時に……」のなかで、奇妙なことが語られ、物議をかもしることになった。この匿名のコラムは、「彼が亡くなるやいなや、噂が飛びかい始めた。フーコーがエイズで亡くなったというのだ」と書いた。そして、この文章は、以下のように続いた。

秘められていたことであったのだが、ホモセクシュアルであったがゆえに、別格ともいべきこの知識人は、まるで当世流行の病の格好の標的となったかのようだ。

診断書などを見れば、間違いなくフーコーは、癌という現代病のなかでも、二パーセントくらいの例しかない特殊な癌を患っていたということが事実だとわかる。だから、こうした悪意にみちた噂にはあせんとするばかりなのだ。その噂では、まるでフーコーが、恥辱にまみれて死ななければならなかったかのよう

うに語られているのだから。

このコラムは新聞購読者たちの激怒を生み、抗議の手紙が『リベラシオン』紙に殺到した。あたかもエイズで死ぬことが恥辱であるかのような記事は、エイズ患者への差別と偏見とを助長することでもあり、独立独歩の左翼紙として定評の高い『リベラシオン』がこのような立場を是認していいはずがないからだ。だが、ディディエ・エリボン(『ミシェル・フーコー伝』)によれば、当の筆者は、名誉を汚す噂に抗してフーコーをかばったのだと思ひ込んでいたらしい。

フーコーの存在は、「帝王」サルトル死後のフランスの思想界にあって、絶大なものであった。一つだけその証拠をあげておこう。『ル・ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール』誌六月二十九日号に掲載されたピエール・ノラの追悼文である。ノラは、歴史学者で、いわゆる「アナール」派と呼ばれる歴史学界の主流の中心人物の一人である。

フーコーが死んだ。この国の知識人で、この言葉がおのれの頭や心にグサリとこない者などはいない。まさに、まだ若いのが、名声を得ており、一人屹立して、学殖豊かに作りあげられたその世界に君臨する、別格で、聖なる、触れてはならない存在であったこの哲学者が突然死んだのだ。(……)どの世代も、その世代の特質を具現する存在を持っている。六〇年代から八〇年代までの世代は、最良であれ最悪であれ、その世代と、そしてわれわれと鬼ごっこをし続け、捕まらなかつた、この悪魔的な風貌の人物のなかに、自分たちの世代を具現する人物を自然に見いだしていたのであった(「われらフーコー世代」)。

時代を具現する存在としてのフリーコーの「死」は、ある種の時代の空白を呼ぶものであり、また、だからこそ、フリーコーが、まさに「時代の病」となりつつあった「エイズ」で死んだという噂は、かなりの説得力と迫力をもっていた。したがって、一般的には否定されながらも、その後もこの「噂」は存続した。まず、アメリカのゲイのコミュニティで、この点が問題にされた。フリーコーが、アメリカで一九八二年におこなったインタビュー（インタビュー——セックス、権力、そしてアイデンティティの政治）が、一九八四年の夏、『アドヴォケイト』紙に公表されたとき、その脚注では、フリーコーが、神経系統の病気でなくなったことに注意がうながされている。さらに、『ニューヨーク・ネイティブ』は、フリーコーの死因をエイズだと述べなかつたと『ニューヨーク・タイムズ』を非難した。七〇年代後半のサンフランシスコのゲイ専用の浴場（バス・ハウス）でフリーコーが何をしゃべったのか、というたぐいの噂が語られました。

#### J・P・アロンの非難

フリーコーは、自分がエイズに感染していたことを知っていたのだろうか。デイディエ・エリボンによれば、フリーコーは、亡くなる前の冬、ジョルジュ・デュメジルに電話をして、「わたしは、自分がエイズに感染しているのはわかっているんです」と告げたという。あるいは、死後、フリーコーの日記を読むことができた友人のポール・ヴェーヌによれば、一九八三年十一月の日記に、「ぼくは、自分がエイズだということはわかっている。だが、ヒステリーをおこすおかげで、そのことを忘れられる」と書かれてあった。

だが、フリーコーの死が、エイズと関連づけて語られることは、以後も避けられ続けた。かくて、フランス社会の公的なメディアで、フリーコーがエイズで死んだことが語られたのは、一九八七年十月、かつてフリーコーの友人でもあった、歴史家、哲学者のジャン＝ポール・アロンの「わがエイズ」（ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール）誌、十月三十日号）という告白によるものだった。

アロンは、社会科学高等研究院の主任教授で、一九八一年、社会党のミッテランが大統領となって生まれた社会党内閣の文相ジャック・ラングの学術顧問に就任したり、この当時は、国立図書館の学術審査会長もつとめていた大物文化人だった。哲学者、社会学者のレイモン・アロンは、従兄弟（レイモン・アロンの父親が、ジャン＝ポール・アロンの父親の弟になる）であったし、ヴィシー政権の歴史を書いた歴史学者ロベール・アロンの弟であった。コレージュ・ド・フランス教授だったロラン・バルトは、親友であり、論敵でもあった。さらに、フリーコーとも、若年のころ親しい友人であった。

アロンは、このエリザベート・シュムラによるインタビューのなかで、フランス社会で、有名人としては初めて、自分がホモセクシュアルであること、また一九八六年一月に、エイズ感染を知り、それ以来闘病中であることを打ち明けた。そして、その後で、フリーコーがホモセクシュアルであること、エイズに感染したことを隠したことを非難した。

フリーコーは、言葉に生きるひとであり、知識のひと、真理のひとであって、実際の経験や感覚の

世界に生きるひとではなかったのです。彼はホモセクシュアルでした。彼は、時折は、無分別なほどの流儀でその生活を享受しながら、それを恥じていました。エイズという病に対して彼が沈黙していたので、私は不快でした。なぜなら、それは恥ずかしさからくる沈黙であって、一人の知識人としての沈黙ではなかったからです。これは、まったく彼が言ってきたことと逆じゃありませんか！

私は、これは馬鹿げていると思いました。フーコーは、私たちが二十五歳だったときの同級生であり、親しい友でしたし、彼の著作は、彼を名声の頂点に押し上げました。彼は、戦後の時代で、ほとんど他を圧すると言っている思想の巨匠でした。というのも、彼は、もはや私がそこには所属していない支配的知識人という制度のなかに、王者として君臨するひとだったからです。今日では、私は、はつきり自分が愚かであったと感じていますし、十分に心の安らぎを得ていますので、次のように言えます。つまり、私は哲学上のアレルギーからフーコーを攻撃していましたが、実は、もう一つ別の理由が、なかば正当化できない理由があったのです。私は、彼が勝ちとった栄光に嫉妬していたのです。

#### 禁忌を侵犯する実践者

この告白と、なかで展開されたフーコー批判は、マスコミに大々的に取りあげられるほどの反響を生んだ。確かに、この告白以後、ひそひそと噂として語られていたにすぎなかった。フーコーのエイズによる死は、ほぼ事実として語られるようになった。

これに対して、猛烈に反撥し、反論したのが、フーコーと二十数年にわたって同居して、苦楽を共にしたダニエル・ドゥフェールであった。彼は、『リベラシオン』紙（一九八七年十月三十一日―十一月一日合併号）のインタヴューのなかで、質問に答えて次のように述べた。

「フーコーがあえて語らなかつたから、私はあえて語るのだ」とジャンポール・アロンは言いたいようです。フーコーは、私生活と作品との関係についていくつかの著作を書きました。彼は、自分については禁欲的な姿勢をとろうとしました。この姿勢のなかでのみ、彼の死はとらえられるものです。アロンはといえば、エイズのことを本当に語っているわけではなくて、懸命に自分がホモセクシュアルであることを語っているだけです。

私は、フーコーと二十三年間生活をともにし、その道徳的な選択も共有しました。もし、私たちが、アロンの言うような恥ずべきホモセクシュアルであったというなら、私は、AIDESという組織を作らなかつたでしょう。著作のなかで、フーコーは、権力という問題枠組のなかに、告白というものを設定しました。彼は、告白そのものに価値を認めなかつたし、つねに、告白というものを、刑事上の取り調べという枠組のなかにあるものとして提示してみせました。これ以外には、私は、AIDESの会長としては、告白やら恥やらには判断を下せません。そういうことは、エイズを通じて人が自分で気づくことなのですから。

AIDESは、ダニエル・ドゥフェールが一九八四年終わりに創設したエイズ患者救済の組織であり、フランスでは先駆的な援助活動をおこなってきた組織である。ドゥフェールは、フリーコーが晩年、極力マスコミを避け、沈黙のなかに身を置こうとし続けた経緯を知っている。そしてエイズによる彼の死にショックを受け、そこからエイズ患者援助活動組織を始めただけに、フリーコーへのアロンの批判は、いいがかりのように思えたのだろう。

ともあれ、ジャンポール・アロンは、翌年八月二十日、エイズのために死亡した。享年六十三であった。彼の雑誌での告白、さらに死の直前六月二十一日のテレビ・インタビュー「エイズ・告白以後」でも、彼は、それを自分の信奉する「絶対的な差異」を求めるダンディズムの理念によるものだ、と述べていた。だから、本人は不本意であったとしても、サルトル亡き後のフランス思想界の帝王と認知され、ポーランドの「連帯」支援でも先頭にかつぎ出されたフリーコーが、沈黙することへのいらだちを隠せなかったのだろう。

だが、フリーコーは、みずからサルトルのような、あらゆる問題に口を出し、指導しようとする「全体的知識人」を志向したわけではない。彼は、むしろ、それを常に否定しなかったのだ。彼は、有名になればなるほど、ピエール・ブルデューが「ル・モンド」紙上の追悼文で指摘したように、「社会の禁忌へ侵犯を試みる一人の学問的実践者」として自己を規定しなかったに違いない。不幸なことに、サルトル的な知識人認識のなかに生きていたアロンとフリーコーとの乖離が、こうした行き違いを生んだともいえないはない。

さらに、ドミニック・フェルナンデスは、ホモセクシュアルの文化史ともいえる「ガニユメデスの誘拐」（一九八九年）のなかで、フリーコーが、ホモセクシュアルであることを公表すれば、その権威によって社会的に大きな影響力をもったかもしれない、と述べて、婉曲にフリーコーを批判した。

だが、フリーコーへの批判は妥当なのだろうか。一九八八年八月二十八日、フランスにおけるゲイ解放運動の先駆、ホモセクシュアル革命的行動戦線（F.H.A.R.）の創設に参加し、その理論的支柱の一人であったギイ・オッカングムが、エイズで亡くなったとき、その追悼の記事のなかで、彼が、フリーコーから深い影響を受けて活動をおこなってきたことが記されている（「リベラシオン」および「ル・モンド」一九八八年八月三十日付）。

オッカングムは、ホモセクシュアルであること、そのことがすでに嫌悪や忌避を生むのはなぜか、と問いかけた。彼は、それは、ちょうど排除される「他者」である移民（外国人労働者）への忌避、差別と同等のものだ、と論じたのである。この議論は、むしろフリーコーの展開した議論と重なってゆくものにほかならない。そして「ル・モンド」紙は、追悼記事のなかで、オッカングムが、一九七八年四月にラジオでフリーコーとおこなった対談のなかの言葉を引用している。いわく、「告白しなければホモセクシュアルであるものなどはない。人はだれも、自分が異性愛者であるなどと言わないものだから」。

告白という制度があつてはじめて、正常とされる支配的な規範によってホモセクシュアルの有罪性が定められる、というわけである。

## モデル小説

フーコーその人は、けっして表立ってゲイであることを公表してはいなかった。だが、ゲイであることは彼の人生の一部であって、すべてではないし、どのような人であれ、私的な性活動を公表する必要などはない。さらに、ゲイの人々がからんだ行動(差別批判)や言論(ゲイ関係の雑誌のインタヴューやエッセイ)の場面では、ゲイであることを隠蔽(かくべい)していたわけでもなかっただろう。

だからこそ、ディディエ・エリボンも、評伝のなかで、ジャン＝ポール・アロンやドミニック・フェルナンデスに強い口調で反論せざるをえなかったのだろう。

しかし、フーコーをうんざりさせたのは、まさに「告白」という考え方そのものではなかっただろうか。彼のうんざりした気持ちは、言え、語れ、語らせよ、という命令を押しつけ、拒否し、はぐらかすために、晩年の著作でおこなわれたあらゆる努力のなかに、その名残りが見いだせる。

にもかかわらず、世間は、このまま、この問題を忘れ去ることはなかった。一九九〇年になって、フーコーの最後の恋人ともいわれたエルヴェ・ギベールが、エイズに感染したことを赤裸々(せきろくろく)に綴った小説『ぼくの命を救ってくれなかった友へ』を発表したからである。作中のミュージュル(Muzil)は、

あきらかにフーコーを思わせる人物であり、その同居人ステファヌ(Stephane)がダニエル・ドゥフェールらしく、もう一人の登場人物マリーン(Marine)が、有名かつスキヤンダラスな女優イザベル・アジャニーらしいとの話題で、この本はまたたくまにベストセラーとなった。エルヴェ・ギベール自身、『リベラシオン』紙(一九九〇年三月一日付)のインタヴュー(「エイズの生」)のなかで、次のようにこの小説について答えている。

「登場人物の」名前は、三度も変えたし、登場人物の様子も変えようと、ミュージュルを長い黒髪の人物にしたりして努力したのですが、まるでうまくいきませんでした。(……)まあ、この本は、また一つの小説ですからミュージュルもマリーンもほかの人物も、登場人物であって、そっくりそのまま描かれているわけではありません。むしろ、本の中のエルヴェ・ギベールという名の人物もまた登場人物の一人なのです。

ごまかしが雑で、ミュージュルがフーコーで、マリーンがアジャニーではない、とは受けとれないのではないか、という質問に対して、彼は答えている。

「名誉毀損などの」法律上の危険を考慮したなどということはないのですが、ぼくは実名をあげま

せんでした。なぜなら、この本は、フーコーとアジャーニとのぼくの関係を物語っている本ではないからです。(……)これは、偏った、不完全な証言です。ここでは、すべては、エイズという面から眺められているのです。だから、ぼくは、フーコーの死の真相や、アジャーニのエイズに関する噂の真相を握る人間などではありません。

さらに、なぜ、フーコーについての本を書かなかったのか、という問いには、以下のように答えている。

フーコーの死後、ぼくは何も語りませんでした。証言するようにと何度も言われましたが、断りました。これからもけっしてぼくたちの物語を、友愛を語ることはないでしょうし、絶対にそうした機会を持つこともないでしょう。ぼくは、フーコーの埋葬の直後、一回だけ、「ある男の秘密」という小説を書きました。これは、その後、ぼくの『汚れなき男モーヴ』という作品集に収められました。そのうえで、ぼくはミシェル・フーコーのイメージを完全に消し去ろうとしました。またフーコーという存在がぼくの心のなかによみがえるのは、耐えられないし、ありえないことだし、そんなことがあっても、ぼくには何の慰めにもならないどころか、喪失感しかもたらさないからです。彼が病院で苦痛にあえいでいるとき、ぼくは、なぜこんなことをするのかと自問しながら日記をつけていました。それで、ぼくは、ある種のまぼろしみたいなものを見たんです。ぼくは、彼が苦しむのを、彼が死ぬのを語りながら、語り続けるのが、ぼく自身の宿命なのだと思えました。まるで

予知をしたかのようにでした。まるで、ぼくは、そのとき、自分がエイズに感染していることを、しらずしらずのうち知っていたかのようにだった。

「ぼくの命を救ってくれなかった友へ」は、確かに、フーコーを崇め奉るような人々からみれば、禁断の書になるかもしれない。だが、そのような反撥自体が、エイズ患者やホモセクシュアルへの差別的な意思の表明であり、フーコーその人の思想や生涯に背を向けることになることに、彼らは気づいていないのである。

むろん、ギベールも述べているように、そこに赤裸々に描写されたミュージルという人物の行動や発言すべてが、フーコーその人のものであるわけではない。デーヴィッド・メイシー(『ミシェル・フーコーの複数の生涯』)もいうように、確かに伝聞に基づいた部分もあるだろう。にもかかわらず、そこには、近くで親しく接していた人間にしかわからないような、迫真的な描写が見いだせるのも確かなのである。ギベールの死(一九九一年十二月二十七日)の後、邦訳も出て、ベストセラーと言っているほどの広がりをもって読まれているこの本を要約する必要はないだろうが、いくつかのポイントにしばって紹介しておきたい。

ミュージルという登場人物は、一九八一年ころ、ギベールと一緒に食事をしたときに、エイズという病気のことを教えられるが、その病気の存在を信じなかった。世界的な名人だったミュージル

は、八〇年代に入ると、自分の名前を消したがつっていた。メディアから追われることに苦痛を感じていた。ミュージルは、できるだけ付き合う友人の数を減らした。あるレストランに友人と入ったとき、鏡にも映らず、客にも顔を見せないですむ席めがけて直行した。パリではあまりにも有名だったので、外は出歩けなかった。

年に一回、サンフランシスコの近くで開かれるセミナーに出かけるときは、サンフランシスコにあるゲイのたまり場のサウナで乱痴気パーティーを心ゆくまで楽しんだ。一九八三年の秋、サンフランシスコから戻ってきたミュージルは、エイズのせいでそんな所には誰もこなくなるだろうとギベールがいうと、こう答えた。

いや、逆に、サウナにあれほど人がいたことはなかったよ。驚くべきことだった。みな恐ろしきを感じているのだが、それが新たに暗黙の支えになって、新しい優しさや結びつきが生み出されているんだ。以前は言葉を交わさなかったのに、今ではお互いに話し合っている。誰もが、なぜ自分がそこにいるのか、よくわかっているんだ。

そして、病院で院長からどうやら不治の病だと知らされたところから、仕事を猛然と始めるようになった。二つの著作の原稿を出版社に渡してからも、毎朝、図書館に出かけては注釈にミスがないかどうかチェックをしていた。そして、ミュージルは、自宅のアパルトマンの台所で倒れ、意識を失って血まみれになっているのを、ステファヌに発見された。

ミュージルの弟は、自宅近くのクリニック・サンロミシェルにミュージルを移し、それからピティエ・サルペトリエールに転院させた。ステファヌは、ギベールに、つい最近知ったばかりなのだが、病気が不治の病であること、脳に手術できない病巣がいくつかあることを話し、なんとしてもこれをパリ中の噂にはならないと述べた。医師は肉親以外との面会を認めなくなった。

ある日の午後、同僚の記者からミュージルの写真をもっているかという問い合わせが入って、ギベールは、ただちに病院に駆けつけた。

ミュージルは亡くなったのだ。

翌日、ステファヌと昼食をとったとき、ミュージルの死因がエイズであることを教えられた。ステファヌも知らないまま、ミュージルの姉に付き添って病院の死亡係のところに行って、記録を読んだのである。「死因 エイズ」という記載を完全に削除してほしい、とミュージルの姉が頼んだのだ。それは絶対秘密にしておかねばならないことだからだ。

### 「沈黙」の文化

実際、ミシェル・フォーコーは、名声をはやしたてられ、道行く人々から指さされる日常を、望んで獲得したわけではなかった。有名になればなるほど、おそらく、彼の孤独は深まったに違いない。ギベールの本は、虚実をないまぜにしているのかもしれないが、晩年のフォーコーのこの孤独を、確かに

正確に写しとっているように思われる。フーコーは、亡くなる前の年にカナダの雑誌『エトス (Ethos)』に掲載された、自分の幼少時代のことなどを語ったインタヴュー（インタヴューの日付は、一九八二年六月二十二日。インタヴューはS・リギンズ）のなかで、「沈黙」の意味について語っている。

フーコー 私は、子供時代をプチブル的な環境、それもフランスの地方のプチブルの環境のなかで暮らしました。私には、訪問客に話しかけ、会話しなければならぬきまりごとが、どうにも奇妙で、退屈なものにみえました。私は、どうして、みんなは、しゃべらなさいいけないと感じているのか、たびたび疑問に思いました。沈黙は、人と関係を持つものには、ずっと興味深いやり方であるはずです。

リギンズ 北アメリカのインディアンの文化には、英語をしゃべる社会やあるいは、フランス語をしゃべる社会よりもずっと沈黙を評価するところがあります。

フーコー そのとおりです。沈黙は、不幸なことに、われわれの文化が捨て去ったもののひとつだと思います。私たちは、沈黙の文化を持っておりません。さらに言えば、自殺の文化も同様を持っておりません。日本人はその文化を持っていると思います。年若いローマ人やギリシャ人は、同席している人々に応じて、それぞれ違ったやり方で沈黙している作法を教えられたものです。その当時、沈黙は、他人との関係の特別な作法をあらわすものだったので。沈黙は、洗練されるために必要な何かだったと思われる。私は、こうした沈黙のエトス（生活態度）が広がってほしいと願っています。

#### 友情Ⅱ朋友愛の消失

さらに、フーコーは、やはり一九八二年六月にカナダのトロントでおこなったインタヴューのなかで、次のようにも述べている。

今、いちばん関心があるものは、友情Ⅱ朋友愛 (amicie) だ。古代からずっと長い間、友情Ⅱ朋友愛は社会関係の重要な様式でありつづけた。この様式のなかで、男たちはある種の自由を享受し、ある種の選択をしていた。むろん、それは情愛の関係でもあった。また友情Ⅱ朋友愛は、経済的、社会的な関わりあいを持っていた。たとえば人は、自分の友達を助けるのが当然だった。ところが、十六世紀から十七世紀にかけて、少なくとも男たちの社会では、この種の友情Ⅱ朋友愛は消えうせた。友情Ⅱ朋友愛は、何か危険なものともみなされ、批判する文章が目につくようになった。軍隊、学校、官僚組織などあらゆる制度のなかで、この情愛の関係は、抑圧され、消されてきた。そして私の仮説によれば、男同士の性愛であるホモセクシュアルが問題となったのは、十八世紀からなのだ。

私は、この時代にホモセクシュアルが一つの問題、つまり一つの社会問題となったとするなら、それは友情Ⅱ朋友愛が消えたからだと思います。友情Ⅱ朋友愛が、なにかしら重要なものを表現し、それが社会的に受け入れられているかぎり、男同士が性的な関係を結んだとしても、誰も気

にもしていなかったのです。男同士が性的な関係を結んだかどうかなど、どうという話でもなかった、つまり、それは重要なことではなかったのです。

それは、いかなる社会的な関わりあいも持たないものであって、そのことは文化的に受け入れられていたのです。男同士がセックスしようが、キスしようが、重要なことではなかったのです。まったくなんでもなかったのですよ。ところが、文化的に受け入れられていた関係としての友情Ⅱ朋友愛がいったん消えうせるやいなや、質問が投げかけられたのです。「男同士が一緒にいて何をしているんだ?」。問題が現れたのは、まさにこの時でした。私は、「以下の仮説が」正しいと確信しているのですが、社会関係としての友情Ⅱ朋友愛の消滅とホモセクシユアルが社会的、政治的、医学的問題だとみなされた事実とは、同じプロセスの一部なのです。

フリーコーもまた、苦悩の生を送ってきた

なぜ、人は本当に親しくなれないのか。男同士の愛、女同士の愛、男と女の愛、多様な愛がなぜ許容されないのか。なぜ、人はこんなにも苦しい人生を送るのか。なぜ人はわかりあえないのか。饒舌じょうぜつなおしゃべりがどれだけ続くとも、なぜこの強烈な孤独感こどくかんは癒されれないのか。なぜ、人は自由ではないのか。

フリーコーの思考は、少なくとも、彼の個人的な人生の苦悩と無縁ではなかった。ホモセクシユアルであることが異端であり、恥ずかしいことであるとされる社会のなかで、おのれの性的嗜好しこうが、なぜ恥とされるのか、というフリーコーの煩悶はんもんは、最後まで彼の思想の原点でもあった。極東の地に生きる

われわれが、二十世紀末の今、なぜフリーコーについて語る必要があるのか、といえば、彼と同様にわれわれもまた、苦悩の生を送っているからである。人と人との間に成立しない友情、殺しあう民族、強制収容所と虐殺の二十世紀、われわれは、途方にくれたまま、来世紀を迎えようとしている。

近代社会がいかに人と人との絆きずなを破壊したのか、いかに生きる作法や生きるための美意識を消滅させたのか、いかに人の内面への管理が進展してきたのか、なぜ、われわれは、学校や会社に毎日通うことを当たり前だと感じるようになったのか。

フリーコーは、こう問いかけ、答えようと苦闘したのである。フリーコーの書物は、けっして難解ではない。むしろ、われわれが陥おちいっている苦悩や苦痛を真剣に考えようとする気持ちを持つ人なら、その世界のなかへ入ってゆくことは容易にできるはずである。フリーコーの思想を難解に見せかけているのは、フリーコーを特殊なエリート集団のなかに囲い込み、特殊な隠語を駆使することによって優越感を味わいたい人々のせいである。

わたしは、この書物で、フリーコーの思想をできるだけその生涯のなかに関連づけて紹介していきたい。そして、できるだけ、ふつうの言葉で、フリーコーの考えたこと、書いたこと、発言したことを読者の皆さんと一緒に考えていきたいと思う。